巻頭言

赤潮研究から環境科学へ*

渡 辺 弘**

人類の繁栄のために、生態学的調和を求めて、人間環境系に磨きをかけていきたいとする思考は、自然への認識を新たにしていく科学の一分野であり、学際的な技術の結集に支えられて、環境科学として体系づけられようとしている。

水質汚濁研究が、技術者の寄り合いに終わるか、科学者としての意識を共にする同志の結合となるか、環境科学研究体制の揺れ動く最近の世相は気になることである。技術者の寄り合いであるとしても、共通の目的意識により結合した技術的連鎖として、がっちりスクラムを組みたい。そこから、環境科学としての意識も根づいてくるであろう。今まで水質汚濁研究の場においては、土木工学的な対策技術の開発に足場を確保されている人の多いせいか、「何のために」という質問の出ることが少なかった。

「瀬戸内海環境保全知事・市長会議」の一環として昭和55年5月、瀬戸内海沿岸の公害関係試験機関により瀬戸内海水質汚濁公害研究会が設置され、兵庫県、徳島県、大分県、広島県が世話役になり、今年3月には第8回会議が開催され、17の研究機関が溢れる熱気のもとに参集した。一方、環境庁は、自治体公害研究機関の協力により、瀬戸内海全域にわたる海底汚泥の理化学分析と赤潮現象の生物学的解明に乗り出し、すでに4年を経過している。

瀬戸内海のような大きな閉鎖海域の調査研究には、新たな技術の集約と連携が求められている。それに参加する研究者の数は多く、赤潮対策研究を合言葉にして単なる分析屋ではすまされない「雰囲気」を肌で感じ始めている。赤潮を病気に例えるならば、皮膚からみつく単なる汚れに過ぎないのか、頑固な皮膚病なのか、或いは命取りになりかねない血液病なのか、そのことを考えようとしている。赤潮は、環境破壊への警報であるに違いない。

21世紀に向かって、瀬戸内海がどのように保全され

略 歴

昭和16年 満州医科大学卒業
同年 慶應義塾大学医学部
24年 京都大学医学部
28年 大阪市立衛生研究所
44年 兵庫県公害研究所所長
医学博士

〔趣味〕 ゴルフ 写真

ていくかは、日本全土の環境保全の将来展望につながる課題である。このような広域水域汚濁の共同研究は、単に瀬戸内海周辺にとどまらず、多くの閉鎖海域、河川、湖沼、地下水と、日本全土に展開されつつある。そして基礎科学としての物理化学、生物学、工学等の象牙の塔の研究者も、長靴をはいて、泥にまみれる科学者として、研究の輪に参加し始めている。環境科学を中心にして、数多い基礎科学分野の知識と技術は、大きく結集されようとしている。

こうした動きは、大学、国・地方関連研究機関、企業体の多くの研究者に共感を呼び、昭和59年11月12日、日本水質汚濁研究協会西部支部の設立総会がもたれた。年に一度の学会だけでは、会員相互の血の通った交流を求めるには、時間と場が足りない。多様な問題意識と、研究者の数とその分布を考えると、当分は、北陸・中京以西を西部支部区域として、処理技術部会、水圏全般測定部会、化学物質測定部会、陸水動態部会、海水動態部会等の部会を適宜に開き、時期が熟すれば、ブロック単位に支部が分割され、独立していくことを期待するとの考え方である。どのようなテーマで、どのように研究者が交流できるか、運営の妙は新進気鋭の研究者の意欲の如何にかかっている。財政的基盤が弱く、見切り発車に近い形になったが、会員それぞれの足場を生かした協力体制の充実を期待したい。これらの努力の積み重ねを通して、環境科学のバイオニアとしての水質汚濁研究協会活動がますます実り豊かなものになることを願ってやまない。

瀬戸内海問題が特集されるに際し、過去4年間、水質汚濁研究協会の副会長の席にあったお礼とお詫びを兼ねると共に、西部支部長としての西部支部発足のご挨拶を含めて、所感を述べさせていただきました。

* A Way to Environmental Science through Red Tide, 昭和60年6月3日受理

** Hiromu Watanabe, 兵庫県公害研究所所長